
~ 俺のバイトは、お化け屋敷 ~

零堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺のバイトは、お化け屋敷

【Nコード】

N4151BA

【作者名】

零堵

【あらすじ】

俺のバイトは、お化け屋敷で働いている。

そこで出会ったのは、家が隣同士のバイト仲間や後輩のスタッフ、酒癖が悪いチーフがいたりしていたのであった。家に帰ると、ブラコンな妹がいたりしている。

そんな俺の、ふつふつのようなふつふつじゃないような・・・日常だったのであった・・・

くプロローグ

「キヤー！！！！」

「大丈夫だ、俺がついてるぜ？」

「うん、武、かっこいいわ〜」

そんな声が聞こえる。

うん・・・やってらんないぜ！って感じなのだが・・・

あ、ちなみに今、いる場所は、何所にでもあるありふれた遊園地

「ドリーランド」と呼ばれるテーマパークの中にある。

お化け屋敷、名前が「デット・スクール」と呼ばれている。

学校をイメージしたお化け屋敷で、建物も結構広く取っていた。

俺は、そこにやって来る客に対して、脅かし役をやっているのである。

今も特殊メイクを施して、かなり怖い顔になっている。

俺は、理科室担当で、理科室にやってきた客を、顔を見せて脅かすという役をやっているのだった。

今もカップルで来た客に対して、うおおお！！と叫んで、驚かしたのである。

「なあ？俺がいるから大丈夫だぞ？」

「うん、本当にかっこいいよ？武〜」

うぜ〜！！早くいなくなれと内心思いながら、驚かした。

バカップルがいなくなると、次の客を待っている

「お疲れ様、京太郎」

理科室にやって来たのは、俺と同じスタッフで、保険室担当の峰霧^{みねき}華^{りか}と言う。

年は俺と同じ二十歳で、もう、一年ぐらいこの「デット・スクール」でバイトとして、働いているのであった。

ちなみに霧華の恰好は、血まみれの服を着て、手にナイフ（レプリカ）を持っている、自殺した少女の役を演じていたのであった。

「ああ、霧華か・・・」

「どうしたの？京太郎、あ、もしかしてさっきの客？」

「ああ、まあ・・・お化け屋敷だからカップルが盛り上がるのは、解るが・・・人前であんなにいちやいちやするのは、なんかむかつくって感じだな」

「まあ、そうよね、お互い独り身は辛いわよね」

「あ、何だったら俺と付き合う？」

「冗談言わないで、私は年上が好きなの、あ、じゃあ私の休憩時間そろそろ終わるから、行くわね？じゃね、京太郎」

「ああ、りよ〜かい」

そう言つて、霧華はいなくなつた。

さて、俺も次の客が来るまで待機するか・・・と思い、指定の場所で待つ事にした。

数分後、次の客がやって来る。

「じ、ここに誰もいないよね？」

「いないと思うよ？ただの理科室だって」

今度は、小学生ぐらいと思われる餓鬼二人だった。

いないと思ってるみたいだから、ここで驚かせればびっくりするな．．
．．と思い、驚かす。

「ぐおおおおおー！」

「きゃああああー！」

「ば、化け物！悪霊退散、色即是空、南無阿弥陀仏！！」

俺は、幽霊か！？と突っ込みたくなかったが、一応客なので、黙って
てる事にした。

ちなみに餓鬼は、俺に向かって、お札？らしき物を投げつけてきた。

「こ、これで足止めできるはず！今のうちに逃げよう！」

「うんー！」

そう言って、餓鬼二人がいなくなる。

．．．足止めてな．．．俺は、この場所から離れる事は出来な
いし

こんなチンケなお札でどうこう出来る筈ないんだけどな．．．

俺は、地面に落ちているお札を、ゴミなので、くしゃくしゃに丸め
てポケットの中に入れる。

汚すと、俺がこの理科室を掃除する羽目になるしな・・・
そう思っていると

「京太郎さん、今日の客はこれで最後です」

そうやって来たのは、このドリーランドの制服を着ていて

このデッド・スクールのスタッフでもある。

よこむらいたいき
横村大樹だった。

年は、俺の一つ下で、十九歳である。

「大樹、と言う事は、もう客が来ないから、今日のバイトは終わりにしていいのか？」

「はい、時間ももう夜ですし、チーフがあがっていいぞ？って言うてましたから、保健室にいる霧華さんにも言うて来ますね？」

そう言うって、大樹は理科室から出ていく。

そうか・・・終わりか・・・バイトをしている間、真つ暗な部屋でず〜っと待機しているの、時間の感覚がまるで解らないので、大輝に来て貰わないと

終わりに解らないのであった。

俺は、とりあえず顔のメイクを落とすべく、スタッフ専用控室に向かう。

そこで、顔のメイクを落とすのに三十分かかって、元の顔に戻った。着てる服装も着替えて、私服を着て、外に出る前に、チーフの所に向かった。

チーフがいる部屋の前にたどり着いて、ノックする。

「森谷京太郎です、チーフ、入ります」

「ああ、鍵はかけてないから入って来るがいい」

「了解しました」

そう言っつて、中に入る。

中にいたのは、二十代ぐらいの黒髪の美人さんでこのドーリーランドのチーフの前田まえたあみ亜美だった。年は二十五で、男っぽい口調でいつも話している。

「京太郎、今日の客層はどうだった？」

「はい、小学生とカップルが多かったです」

「そうか……ふむ……、もっとお客を増やすためにも、京太郎、はりきって怖がらせるのだぞ」

「は、はあ……解りましたよ」

「うむ、よし、今日はもうあがっていいぞ？そうだな……もし暇だったら、私と飲みに行くか？」

「い、いえ、遠慮しときます！では！」

俺は、そう言っつてその場から離れる。

なぜ離れたのかと言うと、前に一緒に飲みに行った時

「京太郎、私の物になれ、というか結婚しろ」と言っつて、襲っつてきたからであつた。

確かに亜美チーフは美人だけど……無理矢理はよくないと思つたので、逃げたのである。

しかもそれを言つた次の日に、完璧に忘れていたので、酔つた勢い

で襲われるのはたまったもんじゃなかったからであった。
俺は、そう思いながら、園内の外に出る。
外に出ると

「お、京太郎？今、帰り？」

「ああ、そうなるな」

そうやってきたのは、さつき会った霧華だった。

霧華は、黒髪のショートでさつき着ていた血まみれの衣装では無く
普通の女が着るような、涼しげな恰好をしていた。

「じゃあ、一緒に帰ろう？家、隣同士だしさ？」

「そうだな」

霧華の言った通り、俺と霧華はマンションの隣同士なのであった。
初めてこのバイトをした時に偶然知って、本当に驚いたな・・・
俺と霧華の二人で、街の中を歩いていく。
マンションは、遊園地からそれほど遠く無く、十分ぐらいでたどり
着いた。

一緒にエレベーターに乗って、同じ階にたどり着く。

俺が、301号室で、霧華が302号室だった。

部屋の前に着て、霧華がこう言ってきた。

「じゃあ、京太郎？明日も、がんばりましょう？」

「ああ、そうだな、明日もやるか・・・」

そう言つて、部屋の中に入る。

普通、自分の家に帰つたら、落ち着く事が出来るのだが・・・俺の場合は、全く落ち着かなかつた。

「お帰り〜！ご飯にする？お風呂にする？それとも・・・わ・た・し？」

「馬鹿言つな・・・京子」

「え〜、ここは普通に私つて言うべきでしょ？兄さん、私、兄さんが望むなら、近親相姦バツチこ〜いつて感じだしさ？」

「何が普通だ・・・」

そう言つてるのは、俺の妹の、森谷京子だった。

京子は十八歳で、黙っていれば普通に可愛いのに重度のブラコンなので、俺としてはかなり困つていたのである。

「ところで、兄さん？」

「何だ？」

「彼女作つてないよね？と言つか、兄さんの彼女になるのは私ときまつてるから、もし出来たら、私が速攻で別れさせてあげるけどね？」

「おい・・・それ・・・本気で言ってるのか？」

「もちろん本気よ」

「はあ……もういい、なんか疲れたから、もう寝る」

「あ、じゃあ、私が一緒に寝よう？それで私の事、襲ってもいいよ？」

「誰が襲つか！、俺は一人で寝るから入って来るな！」

「あ、兄さん！」

そう言つて、俺は、自分の部屋に閉じこもる。

しっかりと施錠して、妹が入ってこれないようにした。

「兄さん、開けてよ！私も一緒に寝る〜！」

そうドンドンと、扉をたたく音が聞こえる。

あゝもう、五月蠅い！一向にやめる気配がないので、しびしび開く事にした。

「扉をたたくな、近所迷惑だろ！」

「だって……兄さんが、鍵を閉めるから……」

「はあ……一緒に寝てやる、それでいいだろ？ただし、襲わないからな」

「それでいいよ、私、兄さんとくっついて寝たかつたし」

そう笑顔で言っている。

うん……なんで、こんな風になっちゃったんだ？マイシスターよ・

・
・
俺は、そう思いながら、明日も仕事があるので、寝る事にしたので
あった・・・

〜プロローグ〜（後書き）

零堵です。

おためしとして書いてみました。

気が向いたら、この物語も連載していこうと思います。

〜第一話〜（前書き）

はい、零堵です。

〜第一話〜

次の日、なんか体が重く感じた。

これは、金縛りにあったと言うのか・・・？とか思うのだが急に息苦しくなった。

息が出来なくなって、目を開けてみると

妹の京子の顔が目の前にあり、俺にキスしていた。

しかも胸元がはだけていて、白色のブラジャーがはっきりと見えている。

「何してんだ、京子」

「あ、起きちゃった〜？で、どうだった？私のキスは？」

「妹にキスされてよろこぶいる奴がいるかよ、そう言う奴はシスコンじゃないか？」

「え〜じゃあ、兄さんは嬉しくなかったの？」

キスされてた時は、甘い香りがしたので、結構気持ちよく

実は嬉しかったのだが、そんな事を妹に言える訳がなかったので

「う、嬉しくない」

そう言うつと、じ〜つと俺の方を見て

「ほんとかな？なんか嘘ついてるように見えるんだけど？」

ギクつとなったが、すぐに平常心に戻る事にした。

「と、とにかく、今日もバイトに行くからな？俺」

「え、今日は兄さんとデートしたかったのに」

「ちなみにそのデートプランってのは、何だ？」

「え？まず、映画行って、ファミレス行って、カラオケ行って、最後にラブホだよ」

「却下、聞いた俺がバカだった」

「え、なんでよ？私、兄さんにならこの体、捧げてもいいって思ってるんだよ？」

「そんな事を思つなよ、そういうのは彼氏にでもやってもらえ・・・」

「彼氏なんていらないもん、兄さんがいればいいし、それに兄さんの子供も欲しいしね」

「でこんなに妹に愛されてるんだ？俺・・・
何か特別な事をした訳でもないのにな・・・」

「と、とにかく、俺は行くぞ、じゃあな」

「じゃあ、いつ帰ってくるの?」

「そうだな・・・今日も一日のバイトだから、夜には帰ってくる」

「じゃあ、夕飯作って待ってるね、あ、なんだったら裸エプロンで待ってようか?」

「それはやめてくれ、他人に見られたら、かなり変だろ、それ・・・」

「え?別に私は、他人に「京太郎の妻です」って言うよ?」

「たのむからやめてくれ・・・、じゃあ俺は、行くよ・・・」

「じゃあ、行ってきますのキスして?」

「い・や・だ!じゃあな!」

「あ、兄さん・・・」

そう言って、出かけた。

何でここまで重度のブラコンなんだ・・・妹よ

俺に彼女が出来たら、相手を殺しかねん勢いじゃないか?あれ・・・
そう憂鬱になりながら、俺のバイト先に向かう。

俺の働いているのは、遊園地の「ドリーランド」と呼ばれている
遊園地だった。

そこのお化け屋敷、名前は「デット・スクール」と言い

建物の形は、学校をイメージしているのである。

俺は、ドリーランドの中に入り、スタッフ控室の中に入る。中に入ると、そこにいたのは、下着姿のチーフの前田亜美がいた。下着の色が黒で統一されていて、美人なので結構興奮するのだがそこは顔に出さないようにして、とりあえずチーフに話しかける。

「あの・・・何してんすか？チーフ、ここ、俺が着替える控室なんですけど？」

「この姿を見て、興奮したか？京太郎？」

「それって正直に言った方がいいですかね？」

「正直に言ってくれ、私は美人だろう？」

「は、はあ・・・確かに美人ですけど？けど、なんでその格好？」

「この格好になったら、京太郎が襲いかかると思ってな？どうだ？私は、いつでもOKだぞ？」

「襲いませんよ！、というか早く服着て下さい！」

「む・・・そうか・・・なら、裸の方がいいのか？」

「だから襲いませんって、何考えてるんですか！？」

「何って、昨日私の誘いを断っただろう？私って魅力がないのか不

安になってしまつてな？だから、京太郎にこの姿になって迫つてみようと思つたのだ、しかし・・・この姿でも駄目か、京太郎は、どういった女性がタイプなのだ？」

「どういつたつて・・・、普通の人ですよ・・・少なくとも、いきなり現われて、下着姿で迫つて来るような人は、いやですね」

「そうか・・・じゃあ、普通の格好をしていたらいいのだな？でだ・・・私の事、嫌わないでくれ・・・」

そう悲しそうに言つてきた。

う、なんか可愛く見えてしまったぞ？

俺は、とりあえずこう言う事にした。

「わ、解りましたよ、そんな事ではチーフの事嫌いになりませんって」

「そうか・・・よかつた、それと・・・私の事は、チーフじゃなくて亜美と呼んでくれないか？」

「い、いや、亜美さんじゃ駄目ですか？」

「まあ、いいだろう、京太郎がそうしたいのなら、じゃあ、私は着替えてくる」

そう言つて、亜美さんは部屋を出て行く。

これでなんとかなつたのか？とか思ったが、考えるのもやめて特殊メイクを施す事にした。

三十分後、鏡を見て、特殊メイクの出来栄を確認する。

うん、かなり怖い顔になっている。

着てる服を着替えて、血まみれの白衣を着る。

着替え終わって、控え室を出ると、いつもの格好をした亜美と衣装に着替え終わった

峰霧華がやって来た。

「さっきは、すまなかったな、京太郎、京太郎はいつもの私でいいんだな？」

「はい、その方がいいです」

「そうか、なら、そうするよ、じゃあ、今日のスケジュールだが、平日なので、夜までこのデットスクールは、営業するぞ、配置は昨日と同じく、霧華が保健室、京太郎が理科室に向かってくれ、じゃあ、今日も一日よろしく頼む」

「はい、解りました」

「了解です」

そう言って、向かおうとすると

「あ、京太郎、終わったら、話かけてもいいか？」

そう耳元で言ってきたので、ちょっとくすぐったかった。

「あ、はい、いいですよ、多分、用事ないと思いますし」

「そうか、じゃあ終わったらな」

そう言つて、亜美さんは、仕事場に行く。

俺も、理科室に向かつて、理科室の中に入り、指定の位置に着く。学校をイメージしているので、壁にスピーカーが備え付けてありそこから、キーンコーンコーンコーンの音とともに

ピンポンパンポンと音がして

スタッフの横村大樹の声が、聞こえた。

「今から、開校です、皆さん、よろしくお願いします」
最後にピンポンパンポンと、終わった。

「今から、始まるな・・・今日も、頑張つて、脅かすか・・・」

そう呟いて、やって来る客を待つ事に、したのであった・・・

〜第一話〜（後書き）

この物語は、恋愛要素ありの
かなりエツチな方向で書こうと思います。

まあ、十八禁にはならない程度に書こうかな・・・と思います。
この物語もよろしくお願いします。

〜第二話〜（前書き）

はい、零堵です。

続きの話です。

〜第二話〜

「クククク、見ましたね！」

「キヤー！こわ〜い」

「大丈夫、俺がついてるぜ？」

「圭吾、かつこいい、好きよ〜」

うん、む・か・つ・く！こんな、暗がりの場所で、キスするな！
そう思い、怒りを混めて、驚かしている。

俺が、いるのは、どこにでもあるありふれた遊園地の

「ドリーランド」内部にある、お化け屋敷

「デット・スクール」と呼ばれたお化け屋敷の内部の理科室に、俺
はバイトとして、いるのである。

ちなみに俺の格好は、特殊メイクで施された顔に、血まみれの白衣、
手にビーカー持っていたりしている。

俺は、この理科室にやって来た客に対して、驚かすという仕事をし
ているのであった。

カップルが理科室から出て、俺は、再び指定の位置に戻る。

全く・・・いちやつくなら外でやれ！って思いたい。

足音が聞こえるので、次の客がやって来たみたいであった。

「はあ・・・怖い、何で俺が、こんな所を一人で行かなきゃ・・・」

やって来たのは、いかにも気の弱そうな、男だった。

足ががくがくと震えていて、いかにもビビリだなって感じがする。

「早いとこ終わらせて、皆のところにもどろっと」

そう言ってるので、俺は、楽しんでもらえるよう、念入りに驚かす事にした。

「クククククククク、今宵のイケニエはあんたか〜い!？」

「うわ! 出た! 化け物! うわあああ!」

そう言つて、男はダッシュで理科室から出て行く。

・・・そんなに怖いか? この顔・・・

確かに、特殊メイクでかなり怖い顔にしているが、そこまで驚く事は、ないと思うんだが・・・

ちなみに鏡で見てみたら、子供だったら絶対に夢に出てきそうな、そんな顔だった。

男がいなくなつて、次にやって来たのは、一人の女だった。

女は、足取りがふらついて、顔も赤く、酔ってるみたいに見えた。

「あははは〜人体模型かわい〜、あれ? 仁くん、どこ〜?」

うん、頭がいつちやってるんじゃないか? 仁君なんていないし、人体模型は確かにあるのだが

その名前だつて、何故かクロイスとかゆう外国の名がついてるし

まあ、俺は、仕事なので、この女も驚かす事にした。

「くくくくくく！今宵のイケニエは・・・」

そういいかけた時、女が抱きついてきた。

「あゝっはっはっは！将君、みっつけた！」

思いつきり抱きしめられて、胸の感触があつたが、それより

目茶目茶痛い！骨がきしむ！ミシミシと音がしたので、握力どれぐらいなんだ！この女は！？

思わず気を失いそうになつたが、離れてくれて、女は足取りもおぼつきながら、理科室から出て行った。

「痛い・・・なんで、俺がこんな目に・・・」

そう、思いながら、指定の位置に戻る。

あとは、普通のカップルが数人やって来て、順番に驚かすのを行つた。

時間が過ぎて、スタッフの横村大樹よこむらいたいきがやって来た。

「京太郎さん、もうお客が来ないので、あがつていいですよ」

「そうか・・・大樹、あの客はなんだつたんだ？」

「あの客って？」

「赤い服を着た、酔っ払った風な女だよ・・・抱きしめられて、俺あやうく骨折しそうになっただが・・・」

「その客ですか、その客は、最初、カップルで移動してたんですが、男のほう途中で逃げて、女がそれを探し回ったみたいなんですよ、ヤンデレ女って感じだと思います、女のストーカーって怖いですね・・・」

「ああ、そう・・・」

将君とか言う男・・・可愛そうに・・・俺は、そう思ってしまった。

「じゃあ、僕は、霧華さんの所に行きますね、では」

「ああ、おつかれ」

そう言つて、大樹は理科室から出て行く。

俺も、仕事が終わったので、スタッフ控え室に行く事にした。スタッフ控え室の中に入り、まず特殊メイクを落としていく。

数分後、元の顔に戻り、着てる白衣を脱いで、私服に着替える事にした。

着替え終わつて、控え室を出て、報告しに、チーフの前田まへだ亜美あみさんの所に向かう。

亜美さんがいる部屋に辿り着き、ノックをする。

「森谷京太郎です、失礼します」

「ああ、あがっていいぞ」

そう言って、中に入る。

中に入ると、ここの制服を着た、亜美さんがいた。

「亜美さん、仕事終わりの報告をしに来ました」

「ご苦労、了解した、じゃあ、京太郎、これから暇か？」

「今の所、何も予定は入れてないので、暇ですが」

「じゃあ、私とデートしよう、早速行くぞ」

「え、デート？」

「何だ・・・嫌なのか・・・？」

そう、悲しそうな顔で言ってくる。

なんか、そんな顔をされると、断るのも悪いかなと思い

「あ、じゃあ、いいですよ」

「本当か！、なら、すぐに支度するから、ドーリーランドの門の前で、待っていてくれ」

「あ、分かりました」

そう言っつて、俺は、園内に出て行く。

そして、正門の前に辿り着き、そこで待つ事にした。
数分後、同じバイト仲間の峰霧華みねぎりかがやって来た。

「あれ？京太郎、何してるの？」

「何っつて・・・待ち合わせ？」

「ふん・・・もしかして、彼女？」

「違うよ、チーフ、誘われたから、ここで待ってるの」

「そうなの・・・まあ、頑張つて、あ、結婚するんだったら、披露宴に呼んでね？じゃね」

そう言っつて、霧華は、帰って行く。

結婚つて・・・全く、考えてないのだが・・・
そう、思っていると、亜美さんがやって来た。

「お待たせ、じゃあ行こうか？」

「あ、はい、何所に行きます?」

「最初から私としては、ラブホでもOKだけど、京太郎は、何所のラブホがいい?」

「亜美さん、何でラブホ限定なんです?他の場所にしましょうよ・・・」

「京太郎は、私の事が抱きたくないの?私って、そんなに魅力ない?」

「いえ、そういうんじゃない・・・でも、俺でいいんですか?」

「いいから言ってるのだが・・・?じゃあ、行こう、私としては、どこでもいいぞ」

「はあ・・・亜美さん、慣れてる感じがするんですが・・・行った事が?」

「いや、ないぞ?というか、私は処女だが?」

「じゃあ、何でそんなにやる気なんです!?」

「京太郎が好きだからに決まってるからだ、好きだったら体で愛し

あいたい、そう思ってるしな？だから何にも問題はないぞ？じゃあ、行くぞ」

「・・・ああ、もう、分かりましたよ、どこまでもついていきます」

俺は、そう思う事にした。

結局向かった先は、ラブホテル「マイ・ドリーム」とかいう場所だった。

なんかいかにもピンク色の雰囲気醸し出している。

店内に入り、部屋を選んで、部屋に辿り着くと、亜美さんがこう言ってきた。

「じゃあ、シャワーを浴びてくるから、それとも一緒に入る？」

「・・・じゃあ、一緒に」

「分かった」

結局、一緒にシャワーを浴びて、その後、なすがままに愛し合う事になったのであった。

情事が終わった後、俺の携帯電話が鳴り始める。

「はい、京太郎です」

「兄さん！なんで帰ってこないの！？私、ずっと待ってるんだけどー!？」

「ずっととって・・・別に、俺がどこで何をしても構わないだろ？」

「そんな事言わないでよ、兄さん！・・・お願いだから早く帰ってきて！」

「分かった分かった、今から帰るよ・・・」

そう言った後、亜美さんがいきなり、俺の携帯を奪い取って、こう言う。

「京太郎は、私と愛し合ってたから遅れてるの、京太郎の時間を取ってごめんなさいね？」

「その女は誰！兄さん！」

「あゝバイト先の先輩、じゃ、じゃな！」

まだガミガミ言ってたが、俺は速攻で携帯を切って、電源を切った。

「じゃあ、妹が五月蠅いから、帰りますよ」

「そうか・・・まあ、明日も仕事あるしな、それより・・・よかったぞ、京太郎、物凄い痛かったが、最後は気持ちよかったし」

「そう言ってもらえると、ちょっと嬉しいですね」

「子供が出来たら、私は生む覚悟できてるぞ、また、したいと思ったら、誘っていいか？」

「は、はあ・・・そのときはその時に考えます、じゃあ、帰りますね」

そう言って、俺は、家へと帰る。

家に帰ると、妹の京子が物凄く怒っていたが、なんとかなだめる事に成功して

疲れたので、寝る事にしたのであった・・・

〜第二話〜（後書き）

十八禁スレスレかもしれませんが、とりあえず投稿します。
まあ、性的表現がないから、セーフかなって感じですが。
これからも、この物語をよろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4151ba/>

～俺のバイトは、お化け屋敷～

2012年1月14日12時46分発行